真に「飛ぶ」ことの意味を問いかける人

長津功三良詩集『飛ぶ』に寄せて

1

長津功三良さんの第八詩集『飛ぶ』が刊行された。二〇〇六年の第七詩集『影たちの墓碑銘』から三年ぶりだ。この三年の間に長津さんとは、『原爆詩一八一人集』（日本語版、英語版）と『大空襲三一〇人詩集』を企画編集し、私と山本十四尾さん、郡山直さんたちと苦楽を共にしてきた同志だった。この二冊の詩選集の発案者は長津さんであった。私も浜田知章さんと話し合っていて同じような考えを持っていたが、いつどのような形で歴史的に原爆詩を書いてきた詩人たちをベースにして行うかは明確ではなかった。その中で具体的に出版の意志を示して動き出し行動の起点となったのは長津さんだった。それを踏まえることで私は浜田知章さんの「広島の哲学を世界に発信すべきだ」という平和の哲学を基にして、現役の詩人を中心に据えて全国規模に、また世界規模に広げていこうと考えて、出版活動全体を計画し実行した実務者となりえた。私たちの中では、この活動を明確に原爆詩運動、空襲詩運動といった詩運動として捉える共通認識が出来上がっていった。今やらなければ日本の歴史上はもちろん、世界の歴史においても原爆と東京大空襲などの無差別大量殺戮の記憶は、風化されてしまうのではないかという危機意識があった。そんな使命感の中心に長津さんがいたのだ。

長津さんとの出会いは、一九九七年四月中旬に浜田知章さんと私を広島駅改札口で出迎えてくれたことからだ。カメラを肩にかけて笑いながら近づいてきたことを覚えている。浜田さんを広島での詩誌「火皿」の講演者に呼んだ人物だと聞いていて、浜田さんの価値を知っている方だと思い、親近感を抱いていた。長津さんはきっと広島・長崎の悲劇の経験を風化させずに世界に伝えていくために、浜田さんのような理念や実行力が必要だと考えて招いたのだろう。私は実際に広島に行き、広島で進行中の詩の運動においてその詩的エネルギーの中心人物は、長津さんだということがよく分かってきた。戦前の広島の記憶、戦後の廃墟の広島の記憶、そして街の復興から置き去りにされる被爆者の記憶、それらをすべて長津さんが背負っている。そんな長津さんは芸術的な詩を書いていた初期の抒情詩人からリアリズムの原爆詩詩人に変貌していき、ついには広島を語り継ぐ詩人の中心的な存在になっていく。長津さんの詩篇を初期から読み返してみると抒情詩の中でいかに原爆のリアリズムを融合させるかを試みていたように思われる。戦後の広島で父が新聞販売店をしていたので、長津さんは初め広島城大手門前にあった原民喜の詩碑を横切って新聞を配っていたという。相生橋近くの被爆校舎の本川小学校に間借りした中学生の長津さんは、疎開先で生き残った引け目を感じながら、平和公園の対岸の原爆ドームを見て青春をおくったのだろう。長津さんほど現役の詩人で広島の悲劇と苦悩、そして平和を語り続ける逞しさを体現している詩人はいないだろう。

2

新詩集『飛ぶ』は三十四篇の詩から成り立っている。Ⅰ章の十二篇の中にタイトルの詩「飛ぶ」がある。出だしの一連目を引用してみる。

仲間内で　呑む時に　いう
おれは　飛ぶぞ
どうせ　誰も　面倒みちゃぁくれんけぇ
いずれ
飛ぶぞ
呆けて　わからんようになる前に
自分で　始末ぅつけにゃぁ　いけまぁ
生見にゃぁ　人造湖が　三つあるけぇねゃ
弥栄湖と　生見川湖　そして小瀬川湖
呆ける前に
どれかの　橋の上から
飛ぶぞ

長津さんの「飛ぶ」という言葉は、単純に読めば投身自殺を意味している。しかしこの「おれは　飛ぶぞ」という切れ味のいいフレーズには、得体の知れないエネルギーが感じられる。なぜなら現代社会の延命治療への根源的な批判が込められているからだろう。人間が人格を無くして「わらからんようになる前に」、頼るものがない独り身の者は、自殺する権利があると長津さんは挑発的に語る。現代のヒューマニズムが、人間の形を無くしても延命させることに対して拒絶を突きつけているのだ。その意味では長津さんは、ヨーロッパの一部の国で認められ始めた死を選ぶ権利を日本でも主張しているのだろう。「自分で　始末ぅつけにゃぁ　いけまぁ」という内からの潔い声に反応して「橋の上から」下を覗き込んでいる姿は、呆けなくとも実は人間の誰にでも訪れる生きる実相であるのではないか。その極限化した問いの形がこの詩の舞台設定であるだろう。長津さんの問いは実存的でもあり存在論的な問いである。私たちは橋の上を歩きながらいつ何時に病気や失意を感じて投身自殺を考えてもおかしくない存在である。私は十八、九歳の頃に弟の死に失意して、橋上に来ると長津さんのフレーズに近い思いを抱いたことがある。たぶん長津さんが投身願望を抱くのは、先立たれた最愛の妻のもとに行きたいという願いなのかもしれない。二章の詩「白の匂い」の最後の三連を引用する。

そこに
女は
もう　いない

白い
匂いが
残っている

風の中に
一瞬　はぐれ蛍の
飛ぶのを
見る

この詩を読むと「白い匂い」をかいだり、「はぐれ蛍」を見るなど美しいものを見ると、長津さんは元気だったころの妻を想起するのだろう。そして妻の魂が「飛ぶ」瞬間に寄り添って行こうとしている痛切な思いが詩行に記されている。しかし自分が生きているからこそ妻を偲ぶことができるという現世に引きとどめるエネルギーがこの詩行に存在することも確かなのだ。長津さんは原民喜の影響を一番受けていると今年八月十五日に刊行された『詩論集　原風景との対話』でも語っている。原民喜は妻が亡くなった後に一年だけ生きようと考えて広島に戻った時に原爆に遭遇した。戦後に『夏の花』『原爆小景』などを書き残して最後は中央線に身を投げた。広島の人びとの中では、原民喜の自殺は朝鮮戦争で米国が原爆を使用することへの抗議のための自殺だと受け取られた。と同時に原民喜は妻のもとへ行きたいという思いもあったろう。それを否定することは出来ない。長津さんは原民喜を尊敬し、きっとその生き方を学んできたろうと思われる。しかし原民喜から一つだけ学んで欲しくないことは、たとえ抗議であっても天命を全うしないことだ。大量殺戮の空襲・空爆のために飛ぶことも、自殺のために飛ぶことも私は認めたくない。真に「飛ぶ」ことは、人間を含めた生命を軽んじて不幸にする構造を、もっと生命を慈しむ世界へと創造的に作り変えるために、大量殺戮兵器を否定することによって人類の精神的レベルを飛躍させることではないか。それは世界中の戦略爆撃機を破棄して、平和を祈念する千羽鶴を飛ばすような試みかも知れないが、そのような祈りが結集した原爆詩・空襲詩運動は、ようやく産声を上げて顕在化してきたばかりなのだ。長津さんの「飛ぶ」ことの真意はきっとそこにあるのであり、これからも私たちに真の「飛ぶ」エネルギーを促し続けて欲しいと願っている。浜田知章さんは寝たきりになっても私たちを最後まで励まし続けた存在だった。浜田さん亡き後、粘り強く最後までそれが出来るのは長津さんしかいないと私は秘かに考えている。